ISSN 0388-4732

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第23巻　第1号

鳥越一向一揆まつり

加賀一向一揆が始まってから五百年目。その節目の年の昭和63年に始まった「鳥越一向一揆まつり」は、今年で8年目を迎えようとしています（今年は8月12、13日開催）。もともとこの地は白山麓一向衆が、金沢御坊の陥落後も勇猛果敢に抵抗を続けた場所であり、それを記念してこの祭は始まりました。

祭のメインは、往事を忍ばせる武者行列です。白山麓一向衆の旗頭、鈴木出羽守を先頭に名だたる武将に村民がふんし、村内を練り歩きます。また、仮装行列も同時に行われ、そのパフォーマンスが行列をもりあげます。そして、夜半には灯篭流しが、続いて村伝統の「じょうかべ踊り」の踊りの輪と続き、最後に打ち上げ花火がフィナーレを飾ります。当日の村内はまさに祭一色となります。この祭は、若者はもちろん老若男女とわず、多くの村民が参加するまさに村民主体の、村民が楽しむ祭本来の姿をもちあわせた村おこしイベントといえます。　（小川　弘司）

里山のニホンカモシカ

林　　哲

金沢に現れたカモシカ

最近、金沢市郊外の高尾町や山科町、平栗町の裏山で、ときどきカモシカが見られるようになっています。

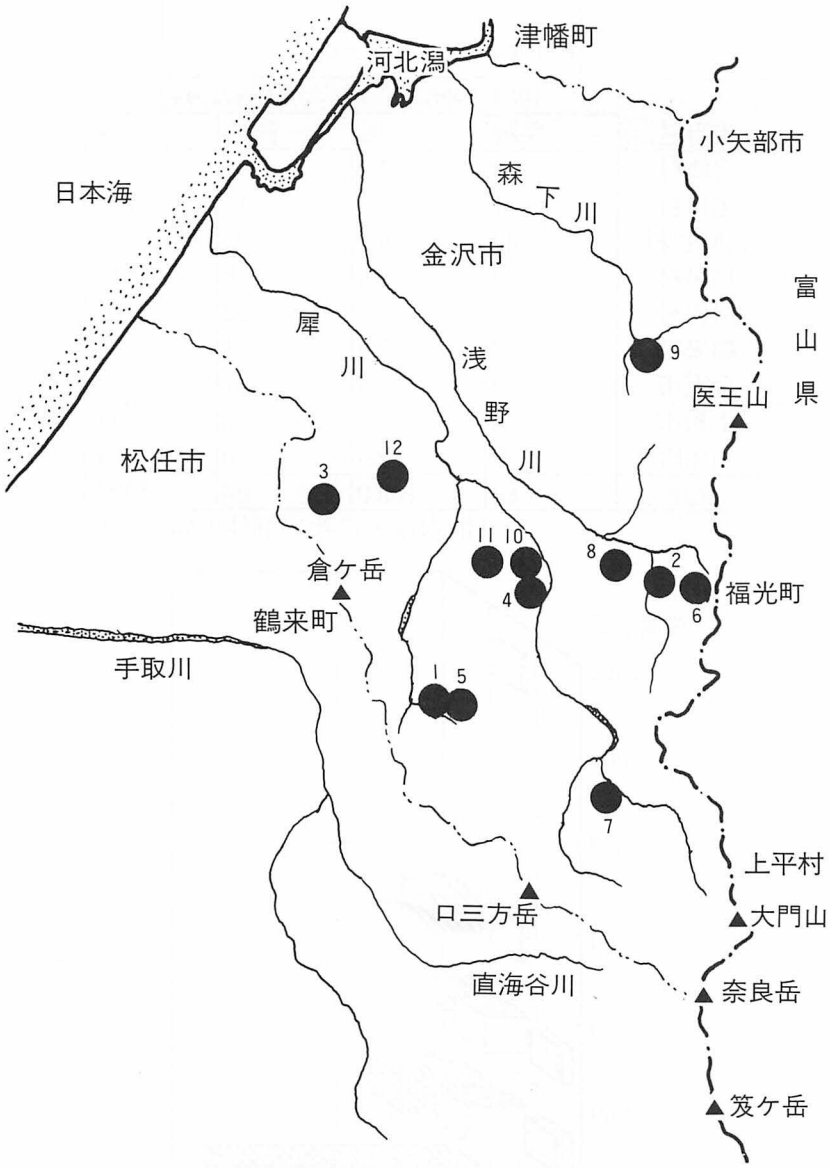
市の中心部からわずか5km程度の里山で、日本固有の大型ほ乳動物が見られるなんてなんとすばらしいことでしょうか。一時は幻の動物と言われていたカモシカが身近な場所でも見られるようになったのは、野生動物の保護が普及してきたことや里山が野生動物にとって好適になってきたからかもしれません。

数千年前の狩猟と採集の時代以来、里山にも生息していたカモシカが、その肉と毛皮や角などをずっとねらわれ続けた結果、里山から山地帯へ、さらには山地の急しゅんな場所に分布せざるを得ないようになったのではないかと思われます。

金沢市平栗町に現われたカモシカ
（青木美紀氏撮影　H6.4.10）

あげくの果てには絶滅しているのではないかと懸念され、1934（昭和9）年に天然記念物に指定されたのでした。カモシカたちが安心して山に暮らせるようになったのは、特別天然記念物に指定された1955（昭和30）年以来のたかだか40年間位ではないかと思います。しかも、人里で見られるようになったのはせいぜい10年前ぐらいからなのです。

犀川を越えたカモシカ



石川県におけるカモシカの分布境界域の情報
（番号は下表と対応）

白山自然保護センターでは、1973(昭和48)年の開設以来カモシカの情報を収集するとともに、手取川流域のカモシカの分布、生息密度、環境状況などを調べています。特に死亡個体の標本収集・整理に努め、県家畜保健所の協力も得て、死因や病気の原因を調べてきました。これらの調査結果によって、昭和40年代後半から50年代のカモシカの情報の多くは、手取川支流の蛇谷(じゃ)を中心とする尾添(おぞ)川流域のものでしたが、昭和60年代に入ってからは徐々に手取川本流域から直海谷(のみだに)川流域の情報が多くなり、分布が広がっていることが分かってきました。一方、これまでのカモシカの分布の境界域は、犀川より南部の地域でしたが、1980年以降、犀川より北部の地域の分布が確認され、浅野川流域や医王山北部の森下川流域にも分布を広げていることが分ってきました。

カモシカの県内の分布境界域での保護・死亡個体の情報（1980～1992）

番号	発見年月日	発見地	状況	死因等	性別	年齢
1	1980年5月7日	金沢市菊水	角欠損、下腹出血	転落死	雄	成
2	1980年10月17日	金沢市湯涌曲	発電所水路に死体	裂傷	雄	幼
3	1983年5月26日	金沢市額谷	人家庭に侵入、保護	-	雄	成
4	1986年3月29日	金沢市寺津	犀川の河原に死体	不明	-	-
5	1986年6月14日	金沢市菊水	内川の河原に死体	不明	雌	-
6	1987年4月7日	金沢市横谷	谷の支流に白骨死体	不明	-	11
7	1990年4月1日	金沢市倉谷	犀川の中州に白骨死体	不明	雌	14
8	1990年7月15日	金沢市湯涌	道路に死体、頚椎と肺に損傷	転落	雄	14
9	1990年8月30日	金沢市二俣	養魚場で保護	外傷	雄	1
10	1991年12月4日	金沢市城力	草地に死体、口内に腫れ	病死	雄	12
11	1992年4月28日	金沢市樫見	市道上に死体、下顎複雑骨折	転落	雌	成
12	1992年12月15日	金沢市別所	草地に倒れ、後死亡	腹部の刺傷	雄	7

カモシカの市町村分布と低標高地の分布

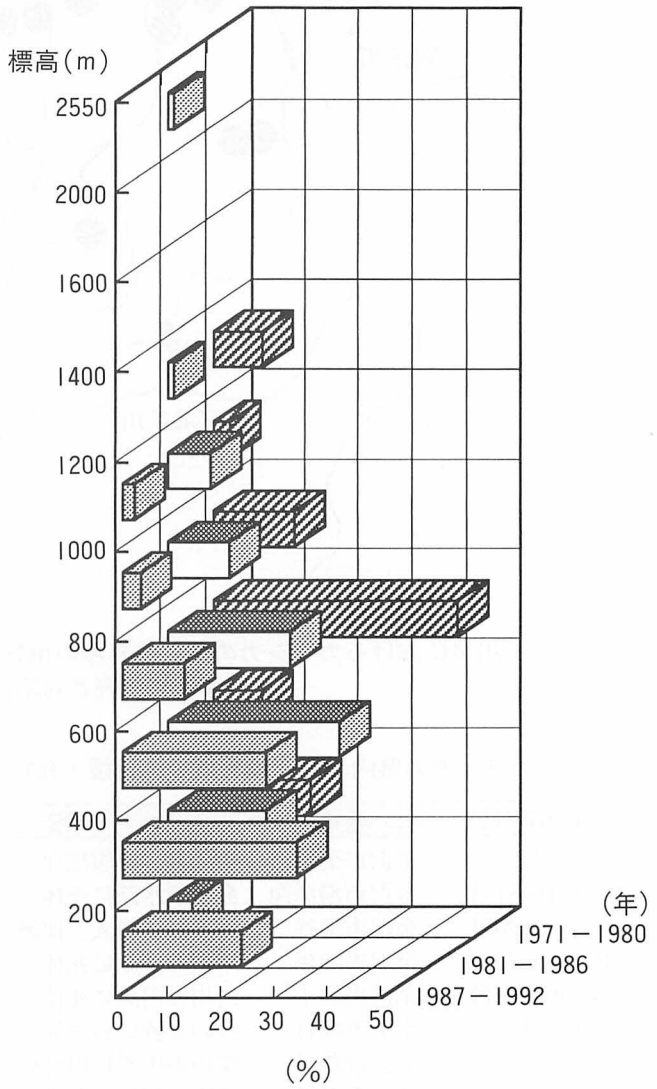
県内では白峰村、尾口村、吉野谷村など9市町村でカモシカの分布が認められていますが、市町村ごとの情報量は過去10年間で変わってきました。たとえば1981（昭和56）年～1986年の調査資料68件のうち、吉野谷村で58.8％占めていたものが、1987年～1992年の84件の資料では29.8％に減少しています。一方、河内村（7.4％から26.2％に増加）や鳥越村（2.9％から9.5％）、金沢市（5.9％から8.3％）では情報件数が多くなっています。これらの事実から少なくとも過去十数年の間にカモシカの分布域は、河内村や鳥越村、金沢市の山間部へ拡大してきたものと思われます。

昭和40年代から50年代にかけての主なカモシカ分布域は蛇谷を中心とする尾添川流域でしたが、その後手取川本流域や直海谷川流域へ延び、河内村や鳥越村にも広がっています。これはカモシカの生息地としての標高が一方で低標高地化していることも意味しています。収集された情報を標高別に整理しなおしますと、1971年～1980年にかけては、標高600～800m、1981年～1986年にかけては400～600m、1987年～1992年にかけては200～400mに情報量が多くなっています。

石川県内のカモシカの情報

市町村	1981-1986		1987-1992	
	件数	%	件数	%
白峰村	2	2.9	3	3.6
尾口村	11	16.2	15	17.9
吉野谷村	40	58.8	25	29.8
鳥越村	2	2.9	8	9.5
河内村	5	7.4	22	26.2
鶴来町	2	2.9	1	1.2
金沢市	4	5.9	7	8.3
小松市	0	0.0	3	3.6
山中町	2	2.9	0	0.0
合計	68	100.0	84	100.0

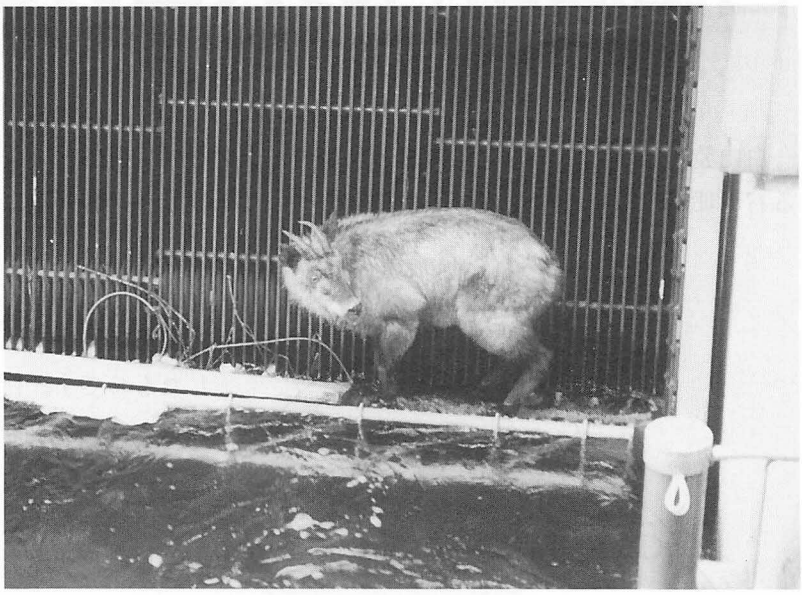
（情報は主に死亡個体の届け出）



カモシカ情報の標高別分布
（各年毎の総計を100とする）

カモシカの事故死と野生動物との共生

カモシカが里山など低標高地域に分布をひろげると、当然のことですが人社会との「衝突」が多くなってきます。作物に対する被害や交通事故に遭う機会が多くなることもその一つです。死亡個体の分析の結果、1970年代から1980年代半ばまでは、なだれに巻き込まれて死亡する例が多かったのですが、1980年代後半から1990年代にはなだれでの事故件数が減り、これに変わって、電力関係施設（電力用水路、沈砂池、貯水池など）に転落し、衰弱して死亡する例が多くなっています。



用水路に落下し上がれなくなったカモシカ
（鳥越村神子清水　H4.8.4）

今後、カモシカの低標高地帯での分布がさらに広がり、個体数が増加すればますますこのような事故が多くなることが予想されます。

白山山系のカモシカの死亡原因

死因	1971-80		1981-86		1987-1992	
	件数	%	件数	%	件数	%
雪崩	12	40.0	18	22.5	4	4.4
転落	4	13.3	4	5.0	15	16.5
溺死	0	0.0	0	0.0	19	20.9
種内闘争	2	6.7	2	2.5	0	0.0
野犬	1	3.3	1	1.3	0	0.0
他外傷	3	10.0	2	2.5	4	4.4
病気	0	0.0	17	21.3	8	8.8
交通事故	1	3.3	0	0.0	2	2.2
密猟	0	0.0	0	0.0	2	2.2
親離れ	0	0.0	0	0.0	1	1.1
衰弱	0	0.0	0	0.0	1	1.1
不明	7	23.3	36	45.0	35	38.5
合計	30	100.0	80	100.0	91	100.0

野生動物のこのような事故は、できることなら未然に防ぎたいものです。たとえば、用水路に転落しても自力ではい上がれるようにU字溝を工夫するとか、カエルやカメでは昔からの決まった通り道には小トンネルを掘る例がありますが、カモシカなど大型ほ乳類の場合でも、その重要な渡り道には人用の道路はう回して設計するとか、替わりの専用道を作ってやるとかの配慮が欲しいところです。野生動物を保護する歴史の浅い日本では、動物と共生するための対応が今後もっと求められるのではないでしょうか。

〈白山自然保護センター〉

白山麓町村の人口の動き

寺本　　要

白山麓の石川郡白峰村・尾口村・鳥越村・吉野谷村・河内村と、手取川扇状地の扇頂部に位置する石川郡鶴来町の５村１町の人口動態について概観し、過疎対策にもふれてみたいと思います。

総人口の変化

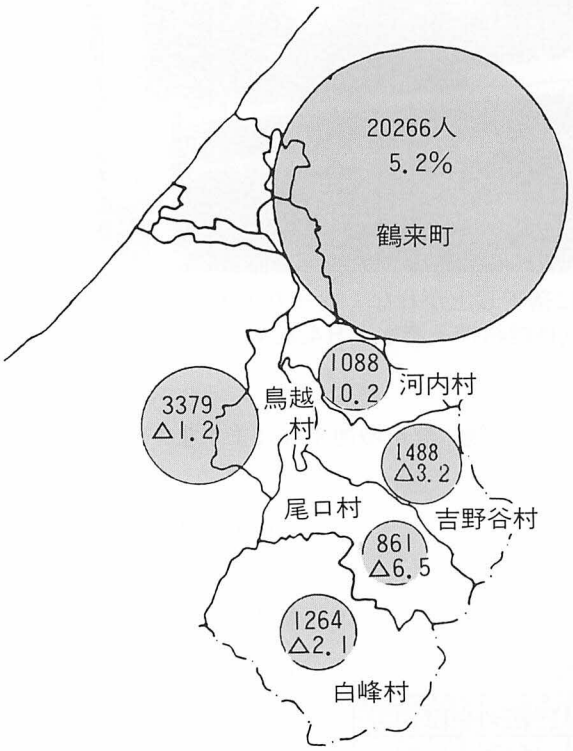


図１　白山麓１町５村の人口と人口増加率
（人口：平2、人口増加率：昭60～平２の５年間
国勢調査により作成）

図１は、平成２年の国勢調査による総人口を示したものです。白山麓５村の人口は、8,079人で県人口の0.7%（面積：15.5%）を占めるにすぎません。人口密度も低く（石川県280人）、白峰村5.7人、尾口村6.3人、吉野谷村10.4人、河内村14.6人、鳥越村45.6人となっています。

図２は昭和40（1965）年から平成２（1990）年までの人口の推移を見たものですが、鶴来町以外は昭和55年まで人口が減少し続けています。昭和50年に吉野谷村、尾口村、河内村の人口が若干増加していますが、手取川ダム建設計画が本格化した昭和46年ごろに建設工事関係者を中心とする転入と考えられます。また、昭和60年から平成２年の人口増加率をみると（図１参照）、石川県全体では1.1%増に対し、鶴来町5.2%、河内村10.2%の増加になっています。河内村の増加は若年層の定着をはかるため昭和61年から分譲を始めた福岡地区のふじが丘団地の入居者による増加のためです。河内村以外の４村は、吉野谷村－3.2%、鳥越村－1.2%、尾口村－6.5%、白峰村－2.1%と若干減少しています。

尾口村を例にとると、明治12年には人口2,156人、世帯数446戸、明治末期には北海道への移住によってやや減少。大正から昭和39年までは人口２千人、世帯数390戸前後と安定していましたが、昭和40年代前半には青年層を中心とする単身離村がみられました。続いて40年代後半に第２次ベビーブームの時期を迎えますが、出生率は高くならず人口・世帯の流出が続き、挙家離村による過疎化現象が昭和55年頃まで続きました。

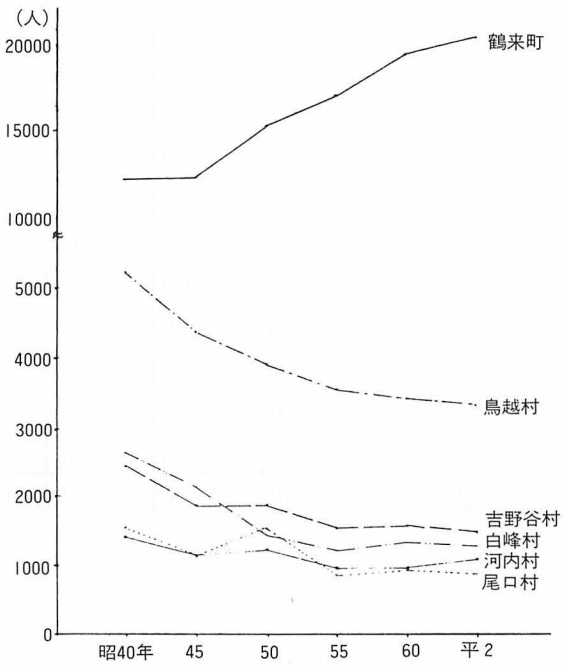


図２　白山麓１町５村の総人口の推移
（昭40～平２）（国勢調査により作成）

図３は、平成６年までの白山麓５村の人口数の変化をみたもので、昭和55年から５村全体として横ばい傾向を示しています。

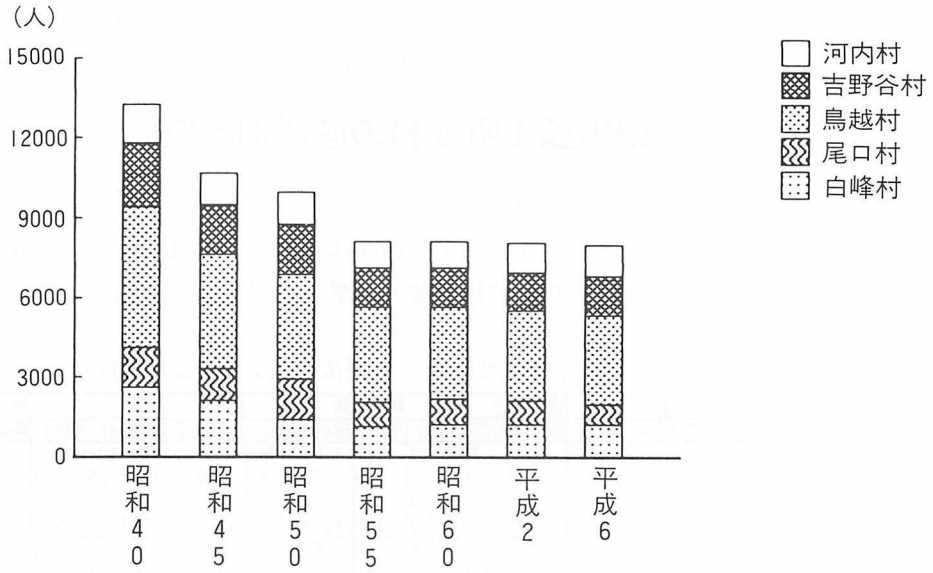


図３　白山麓５村の総人口の変化
（昭40～平２：国勢調査、平６：県の統計より）

白峰村における人口構成の変化

図４は、昭和45（1970）年と平成２（1990）年の白峰村の年齢別・性別人口構成を示したものです。白峰村は、人口性比が106.5（平２年、県：93.5）と男性が女性を上回る数少ない村です。これは古くからの砂防・治山事業関係の建設業従事者が多いことや、若い女性の就職・結婚による村外流出が原因と思われます。

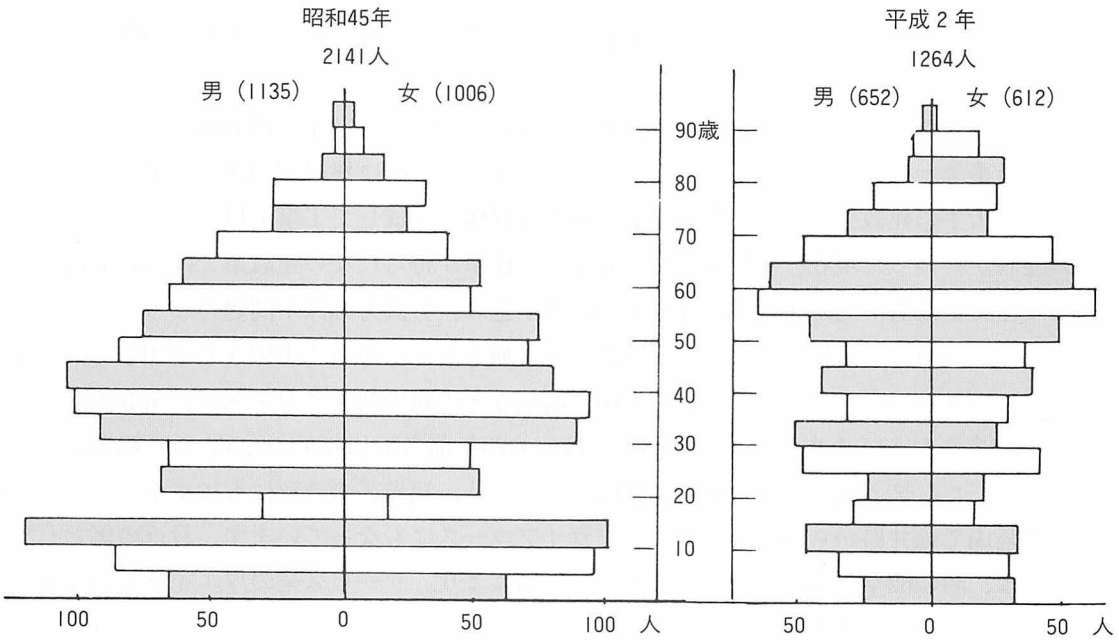


図４　白峰村の人口構成（５歳階級別）　（国勢調査より作成）

昭和45年のグラフは、15～30歳の若年人口が少ない山村に多い過疎タイプの「ひょうたん型」を示しています。15～19歳の層は村外に下宿する高校生が多いため少なくなっています。平成２年のグラフをみると、高齢化が進行していることがわかります。昭和45年に０～14歳の子供たちは531人いましたが、20年後の20～34歳の若年層は211人となっており、死亡率の低い年齢層であることを考えると約半分以上が流出したことになります。また、平成２年の20～34歳の女性が89人と同男性の122人に比べ極端に少なく、これが年少人口の少なさの原因の１つになっています。

白山麓１町５村の産業別人口

表１は、白山麓１町５村の産業別人口の変化を示したものです。鶴来町を除く白山麓５村では、建設業の割合が極端に高くなっています。表中の構成比をみると、就業者の５～６人に１人は建設業に従事しています。平成２年の石川県の建設業の就業者の割合は、9.3％です。

表１　白山麓町村の産業別人口構成（国勢調査より作成）

町村名	鶴来町				河内村				吉野谷村				鳥越村				尾口村				白峰村			
年号	昭45	昭55	昭60	平２	昭45	昭55	昭60	平２	昭45	昭55	昭60	平２	昭45	昭55	昭60	平２	昭45	昭55	昭60	平２	昭45	昭55	昭60	平２
農業	1474	679	486	410	170	90	77	65	218	76	68	64	1156	383	391	393	104		2	1	66	26	25	23
林業	13	10	16	9	22	12	7	7	13	6	7	5	22	41	40	13	20	2	22	14	65	65	43	30
漁業	5	3		1		3	3	3			3						1		3	6		1		
第１次産業	22.0	8.0	5.3	4.0	26.7	18.6	15.8	12.6	21.7	9.4	9.3	8.5	45.8	20.0	21.6	21.0	17.4	0.4	5.3	4.3	10.2	11.5	8.6	7.1
鉱業	55	29	36	27	27	1	1	9	2	7	9	5	84	60	38	32	9	3		3	37	2	1	1
建設業	610	1198	1351	1386	157	110	115	102	265	188	182	141	356	489	403	317	201	99	105	73	412	199	193	157
（構成比）	9.0	13.9	14.2	13.2	21.8	19.5	20.8	17.1	24.9	21.4	21.7	17.5	13.8	23.1	20.2	16.4	27.9	21.5	20.8	15.0	32.1	25.0	24.3	21.0
製造業	1707	2232	2366	2872	150	163	142	140	165	172	158	169	312	402	410	433	171	87	70	68	244	140	110	134
第２次産業	34.9	40.0	39.4	40.7	46.4	48.5	46.7	42.0	40.5	41.8	41.6	39.0	29.2	44.9	42.6	40.4	52.9	41.1	34.7	29.6	54.0	42.8	38.3	39.1
卸小売飲食	1085	1686	1979	2159	56	35	53	57	76	90	91	86	149	190	161	165	31	52	48	50	87	86	100	85
金融・保険	137	237	266	295	5	9	6	4	6	17	11	13	27	47	46	39	5	5	9	3	6	7	8	6
不動産	10	24	39	46				3	1		1			2	3	1								
運輸・通信	421	540	606	663	21	18	20	25	81	49	44	44	134	101	94	87	35	24	22	31	54	30	25	32
電気ガス水道	66	94	70	75	15	10	8	12	68	52	47	37	53	39	36	24	25	14	10	8	13	6	7	4
サービス業	1026	1643	1987	2281	60	82	82	131	140	166	158	184	207	287	299	349	86	125	160	174	268	184	232	219
公務	164	263	314	293	36	32	38	38	31	54	59	60	73	78	76	83	32	49	51	54	32	51	49	54
第３次産業	42.8	51.9	55.2	55.2	26.8	32.9	37.5	45.2	37.8	48.8	49.0	52.5	25.0	35.1	35.8	38.6	29.7	58.5	59.4	65.7	35.8	45.7	53.1	53.6
分類不能	24	7	9	7	1			1			1				1	1			3	2				1
総数	6797	8645	9525	10524	720	565	552	597	1066	877	839	808	2573	2119	1998	1937	720	460	505	487	1284	797	793	746

このように白山麓地域では、建設業に依存した就業構造になっていますが、その要因としては、大正初期から始められていた白山の砂防事業があげられます。白山地域は地質や気象状況からみて地すべりや土砂くずれが多く、これまで水害によって多くの犠牲者がでており、砂防事業に力が入れられてきました。

さらに、昭和49年～55年にかけて、手取川ダム建設を中心とした総額2,600億円にものぼる手取川総合開発事業という大プロジェクトがあったことが、一時的に建設業の活況を呈しました。この事業には、大手の建設会社と白山麓の建設業者が共同体を結成して工事を担当しました。

ダム建設が終わった現在、年間を通じて安定した仕事が得られない建設業では若い労働力が少なく、土木作業従事者の高齢化と地元従業者の減少が進み、労働力確保が問題となっています。砂防事業には、能登地方や県外（勝山市、大野市、東北地方など）からの出稼ぎも増加しています。

また、白山麓地域は、スキー場、白山登山、温泉などの観光開発に力を入れ、第３次産業の従事者の割合が高くなってきました。昭和63年には、約20年前の昭和45年の2.5倍もの観光客が白山地域を訪れました。ダム建設を機に道路が格段によくなり、観光客の誘致にも拍車がかかり、加賀地方や谷峠経由で福井県からの手軽な日帰りドライブコースにもなっています。最近の例としては、河内村では、昭和62年に開設したセイモアスキー場により、サービス業のウエイトが高くなっていることが表１からわかります。

手取川ダム建設にともなう人口の減少

昭和55年５月、手取川ダムが竣工し、白山麓の人々の生活にも大きな変化が現われました。ダム建設により、国道157号線の付替えを機に冬期間、雪に閉ざされてきた豪雪地帯の無雪道路化が進みました。尾口村、白峰村では、これによって、鶴来町、野々市町、金沢方面へのアクセスが一段とよくなり、白山麓村民の通勤圏の拡大をもたらしました。しかし逆に、鶴来町などに移住し元の職場に通うという離村パターンもみられ、必ずしも人口流出の歯止めとはなっていないようです。ダム建設にともないこの地域に与えた最も大きな影響は、水没にともなう戸数(人口)の減少です。水没地域の戸数は345戸に及びました（表２)。ダム建設にともなう水没補償交渉は、何回となく協議がもたれ、昭和48年12月に水没地区住民（白峰・尾口・河内）と電源開発、北陸電力との間で、一般補償の協定書に調印が行なわれました。貯水直前の昭和54年５月29日には、「水没地域お別れ会」がダム展望台で行われました。

水没対象集落で、千数百年の伝統のある白峰村桑島の場合、224世帯のうち164世帯が村外移住、27％にあたる60世帯（203人）が村内の代替地に移住ということになりました。村外の移住先は、鶴来町82（うち集団移住地の桑島町57)、金沢市56、松任市・野々市町20、その他６となっています。白峰村では予想外の離村者の数に驚き、これをくい止めるために村内に残る者に対して、定着資金を支給しましたが、期待した程の効果はなかったようです。また、尾口村の村外移転先は、鶴来町31（うち集団移住地の深瀬新町15)、金沢市30、野々市町９となっています。

表２　手取川ダム建設関連による離村戸数
（白峰村手取川ダム誌より作成）

白　峰　村		尾　口　村		河　内　村	
桑島	225	深瀬	56	中直海＊＊	17
下田原＊	5	五味島	19		
		釜谷	20		
		鵜ケ谷＊	3		

＊：水没しないが、ダムにより孤立するため離村
＊＊：手取川第３発電所ダムによる

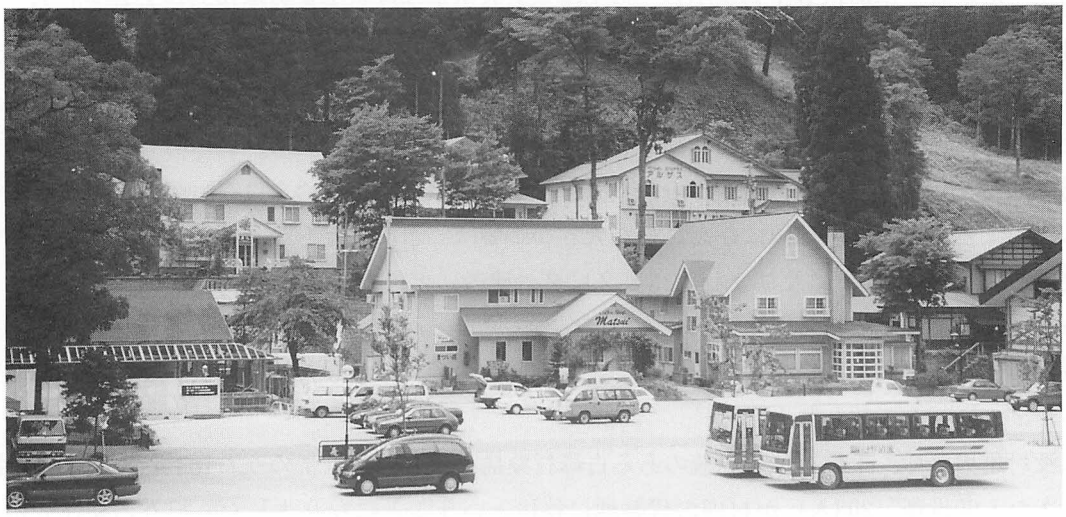
過疎対策の今後

人口から白山麓の５村の変化をみましたが、鶴来町が白山麓の５村の人口を吸引しながらこの20年間増加を示しているなかで、鳥越、吉野谷、尾口、白峰では人口がこの10年、停滞ないし、ゆるやかに減少してます。そのため、各村ごとに過疎化防止のためのさまざまな対策がなされています。そのやり方には村ごとに特色があり、例えば、生活環境の整備が行われたり、観光業など新しい産業を起こしたり、また団地の造成も行われたりしています。そういった各村ごとの取り組みを紹介したいと思います。

【河　内　村】

「ふじが丘」住宅団地。この分譲住宅地は人口増と村の活性化を目指して昭和59年に計画され、比較的低価格で、若年層を対象として昭和61年から分譲されました。村の事業であり、税金や融資制度などで村の助成も行なわれています。平成６年入居が完了しており、人口184人（53世帯）の団地としてこの３月には「ふじが丘」という町名もできました。住民は97％が村外からの入居者で、金沢への通勤者が多いようです。金沢の片町まで車で35分という近さです。同村ではさらに、「きりの里」団地の造成に取り組んでいます。また、セイモアスキー場の開設によりＵターンした村民

もみられ、30代前後の若者層の雇用を促進し、魅力ある生活環境づくりが成功していると思われます。自治体のバックアップは、今後の人口動態に大きく左右してくると思われます。



ペンション群の景観（河内村内尾）

【鳥　越　村】

鳥越村では、道路事情もよくなり、鶴来・金沢方面へ通勤している人が多く、近年は、人口も横ばい状態です。近年、手取川遊園の跡地にバードハミングリゾートゾーンをつくり、自然を生かしたリゾート地域の整備を行なってきました。村外だけでなく村民のレジャーを兼ねた施設となっており、人々のいこいの場となり、かつてのにぎわいがもどっています。また、この施設の設置により、パートを含めて45人の雇用を生み出しており、経済効果も大きいといえます。

【白　峰　村】

過疎化を防止する手立ての１つとして集落内の無雪化をはかるため、ダム建設を機に流雪溝を完成しました。「56豪雪」には、国道はもちろん村内の道路にも雪がなく、豪雪の村のイメージは少なくなりました。村民が生活しやすい環境を整えていくことの大切さを物語っていると思われます。その他に、白峰村では、ダム建設関連の生活環境の整備事業として次のようなものが実施されました。

（１）県道白山公園線道路改良事業
（２）白峰村簡易水道
（３）白峰小中学校統合校舎等の新築事業
（４）公営住宅建設事業（県営住宅５階建て２棟）
（５）村道久保向線建設事業
（６）白峰小中学校の屋外運動場、照明施設、プールの新設事業
（７）桑島公民館新築事業

＊（１）～（４）は「水源地域対策特別措置法」に基づく整備事業。
（５）は「発電用施設周辺地域整備法」に基づく整備事業。
（６）（７）は「手取川総合開発特別事業」に基づく整備事業

しかし、白峰村役場にうかがった時、「ダムによって白峰村が失った人的資源（人口）の損失は計りしれない」との言葉はずっしりと重みが感じられました。

【尾　口　村】

尾口村には手取川ダムサイトがあり、ダム完成時（昭55）には12億円の固定資産税が入り、県内では唯一の地方交付税不交付団体となりました。しかし、毎年４～５千万円ずつ減価償却が進み、平成２年には７億円に落ち込んでいます。また、「発電用施設周辺地域整備法」に基づき次の事業が昭和50年から実施されました。特に（１）は一里野開発推進の起爆剤となっています。

（１）一里野公園施設建設事業
（２）尾添簡易水道施設地事業
（３）東二口歴史民俗資料館建設事業
（４）深瀬集落集会場建設事業
（５）その他　テレビ中継局、共同アンテナ、無線、融雪溝、消防、道路、公民館など公共施設の拡充整備事業が行われました。

【吉　野　谷　村】

自然を生かした観光・レジャー産業の振興に力を入れ、熱帯植物園（花ゆうゆう）、大門温泉センター、中宮温泉スキー場、工芸の里、キャンプ場など観光立村に努めています。また、“住んでみたい村、住んでみてよかった村”を目指し、平成５年から「味智の郷」(54区画）の分譲を行なうなど、過疎対策をふまえた宅地造成も行なっています。

味智の郷（吉野谷村吉野北）

まとめとして

白山麓の各村は、近年、白山山系・手取川水系を中心とした豊かな自然、温泉、スキー場、キャンプ場、歴史文化遺産などを組み合わせた観光開発に取り組んでいます。鳥越村・河内村・吉野谷村では大日川・手取川を生かした白山麓テーマパークの計画も持ち上がっています。白山麓地域は、「自然は豊かであるが、人口が少ない」といえますが、逆にその豊かな自然が人間の開発から守られているということであり、いたずらに自然を破壊する目先の開発行為ではなく、数百年先をにらんだものであってほしいと思います。村に住む人々の立場からは、自然と調和の取れた地域社会をベースとして、その中での雇用機会の増大のための観光開発が望ましいでしょう。また、この地域を訪れる人々にとっては、すばらしい自然にいつでもふれることのできる白山麓であってほしいと思います。

末筆ながら、白山麓各村の役場の皆様にご協力いただき厚くお礼申し上げます。

〈金沢辰巳丘高校〉

白山麓で観察できる昆虫類
—春・初夏編—

富樫　一次

チョウの仲間

写真１　ヒオドシチョウ

春到来とともに山路をかなりの速度で飛びすぎる一群のチョウ類がいます。これは成虫態で冬を越したクジャクチョウ、ヒオドシチョウ（写真１）、ルリタテハ（写真２）、アカタテハなどです。

４月下旬から５月中旬にかけては、「春の女神」と言われているギフチョウ（写真３）が見られ、カタクリの花の蜜を吸う姿が観察されますが、近年その個体数は減少の一途をたどっているように思われます。ギフチョウよりやや遅れてウスバシロチョウの飛ぶ姿も認められますが、本種の食草であるムラサキケマンがなくなれば、その地域ではウスバシロチョウが絶滅してしまうので注意してほしいものです。

写真２　ルリタテハ

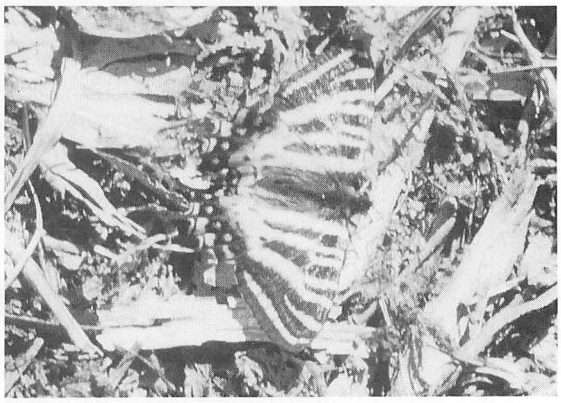


写真３　ギフチョウ

植物を食べる昆虫

周辺の植物に注目すれば、ツリバナの葉をたばね、その内部で葉を食害するスガの１種の巣、ヤマボウシの葉の表面を内側にして折り曲げ、その内部で葉肉を食害するヤマボウシヒメハマキの幼虫の巣も見つけることができます。この他、シナノキ、ハンノキ類の葉をまくハマキガ類の幼虫の巣も目につきます。さらに、ブナ帯にまで入り込めば、ブナの葉をまくホノホハマキ幼虫の巣を見

ることもできるでしょう。

秋でもないのにブナ林の中に褐色の樹冠をもつブナが出現することもありますが、これはブナアオシャチホコ幼虫の大発生によりブナの葉が食害された結果です。しかし、白山ではここ10年ばかり、このような現象は見られていません。同様の現象がケヤキでも見られることがあります。この場合はナミガタチビタマムシ成虫による食害の結果ですが、奇異な感じをうけることは間違いないです。

また、葉の一部分が、枯れたような部分がみられることがあります。これは「潜孔痕（せんこうこん）」(写真４)といい、昆虫の幼虫が葉を食べたあとです。たとえば、ケヤキの葉の一部が褐色に変色しているのを目にすることがありますが、これはアカアシノミゾウムシ幼虫の潜孔痕です。同じようにミズメ、ヤマハンノキの葉でも褐色の潜孔痕が認められますが、これはムモンノミゾウムシ幼虫によるものであり、エノキの葉でもエノキノミゾウムシ幼虫の潜孔痕を認めることができます。この他、コナラやミズナラの葉でもノミゾウムシ類の潜孔痕を見つけることができます。

ナラ類の葉やオヒョウの葉にはオトシブミやゴマダラオトシブミなどが、卵を生むためにゆりかごのような揺籃（ようらん）をつくる姿も見られます。

そのほか、ミズキやガマズミ、オオカメノキなどの花にはヒメハナカミキリ類やハナカミキリの類、ハナムグリ類、コメツキムシ類、ハナノミ類などが飛来しており、ヤマボウシの花にはカンボウホソトラカミキリの姿も時に目にすることができます。

写真４　ミズメの葉に形成されたムモンノミゾウムシの潜孔痕

地上でみられる昆虫

山路の側溝内には時にマヤサンオサムシやクロナガオサムシ、アキタクロナガオサムシ、オオオサムシなどが落下し、さまよう状況が見られます。ゴミムシ類も落下していることがあり、まれにガロアムシの落下していることもあります。このように側溝にも注意する必要があります。

また、時にはセキツイ動物の死体が見られますが、これは一度ひっくり返してみる価値があります。というのはシデムシ類やエンマムシ類が時に採集できるからであり、動物のフンも注意してみるとマグソコガネ類やハネカクシ類を見つけることが可能です。

写真５　ヤマハンノキを食害するミロアシハバチ幼虫

写真６　山路につくられたヒメハナバチの１種の巣孔入口

ハチの仲間

フジやミズキ、ウワミズザクラ、ウツギ、タニウツギなどの花が咲くと、ヒメハナバチ類、ヒゲナガハナバチ類、クマバチ、マルハナバチ類にツヤハナバチの類が吸蜜・採花粉のために飛来します。もちろん、ワサビの花やスミレ、カタクリの花にもハナバチ類が飛来します。マルハナバチ類はカタクリの方に多く見られ、クマバチはフジの花に多くみられます。クマバチがフジの花の近くでホバリングしている状況はよく観察されますが、人をおそうことはありません。ツヤハナバチ類はモミジイチゴの枯茎などを利用して営巣し、ヒメハナバチ類は土中に巣をつくることはよくしられています。

アシナガバチ類やスズメバチ類は民家の軒先など、適当な場所に営巣しますが、巣に対し危害を加えない限り、攻撃することはありません。獅子吼高原では比較的珍しいチャイロスズメバチが採集されています。

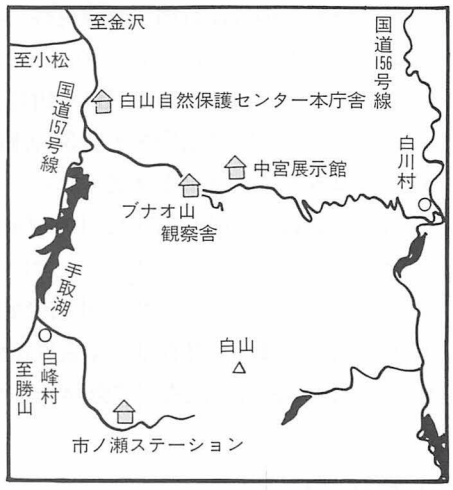
ヒメヤシャブシの若芽にヒメヤシャブシハバチが産卵のために集まり、ヤマハンノキの葉にはヒラタハバチの１種が産卵のために飛来します。

ずいぶんと大まかに自然公園や白山山麓で、簡単に目につく昆虫類や巣などについて書きましたが、山に登られる場合には周囲を見廻しながらゆっくりと歩いて頂ければさらに多くの発見があるでしょう。植物の葉に穴があいていたり、葉の縁がかじられていたりすれば、虫が食ったなと思って改めて見直したり、葉が縮れていればアブラムシ類の寄生を考えたりしてゆけば山道はさらに楽しくなるでしょう。

〈石川県県民生活局〉

施設だより　本号から、当センターに所属する各施設からのたよりをのせます。

中宮展示館から　　海崎　夏樹



中宮展示館では、白山の自然や白山麓の焼畑などの山村文化の展示、説明を行っています。例えば、施設内のブナ林展示室では、ブナ林のジオラマを設け、音と光による演出を行っています。また、四季折々の美しい白山のブナ林を知っていただくために、ハイビジョン映像も上映していますので、ぜひご覧下さい。

今の時期は野猿広場にサルたちはあまり出てきませんが、梅雨が明ける７月下旬～８月になると、毎日のようにサルたちと出会えます。サルたちが出てこないこの時期でも、周辺では野生動物が多く、アカショウビンなどの美しい鳥なども見られます。自然観察路を歩けば、雨や霞が良く似合うヤマアジサイが、このうっとうしい梅雨時期の気分を吹き消して、目を楽しませてくれます。

みなさん、この雨の中に飛ぶアカショウビンや雨降る森を見に来られませんか。

市ノ瀬ステーションから　　殊才　実

今年は、4月28日に県道白山公園線（白峰～市ノ瀬間）が、冬期閉鎖解除されて通行可能となり、29日に白山自然保護センター市ノ瀬ステーションも開館しました。

５月１日には春山開きとなり、中には室堂～甚之助ヒュッテ周辺での春山スキーを楽しむため、スキーを背負って市ノ瀬から歩く（ゴールデンウィーク中には市ノ瀬～別当出合間は閉鎖）登山者も見えました。連休中は天候にも恵まれて、市ノ瀬では県内外からの利用者が例年になく多く、野営場は、ファミリーキャンプの人達でにぎわいました。野営場から少し下った所では、白山の展望もでき、根倉谷ではミズバショウも見られ、訪れた人達は満喫された様です。利用者の多かったゴールデンウィークでしたが、連休中の事故は一件もなく終わり、ホッとしています。ゴールデンウィーク中に市ノ瀬に訪れた人達は3,000人以上で、その内、市ノ瀬ステーションの入館者は、600人以上でした。

これからは、本格的な登山シーズンに入りますが、7月上旬まではまだ残雪も多く、登山される方は、十分な注意が必要です。そして、危ないと思った時は、無理せず引き返す勇気が必要です。それが、自分の命を守る事につながります。山中では、まれにツキノワグマに遭遇することがありますので、1人で歩くときは音の出る物を身に付けた方が良いでしょう。以上の事に気を付け、快適な登山をしましょう。

最後に、「自然を守る事は、自分自身をも守る事にもなる」と、私は思っています。

にぎわう市ノ瀬野営場

センターの動き　（6月20日現在）

4.17　クマ調査打ち合わせ会議（金沢市）
4.28　長野県環境部自然保護課視察（本庁舎）
4.29　中宮展示館・市ノ瀬ステーション開館
5.5　ブナオ山観察舎閉館（11月19日まで）
5.12　ジライ谷野猿広場対策会議（吉野谷村）
5.18　県政バス見学（中宮展示館）
5.24　大蔵省・環境庁係官視察（中宮展示館ほか）
5.26　自然公園指導員会議（本庁舎）
5.28　吉野谷村グリーンデー（中宮展示館ほか）
5.30　岐阜県林業公社視察（中宮展示館）
6.2　白山自然保護調査研究会幹事会（金沢市）
6.4　ブナ林自然観察会（市ノ瀬ステーション）
6.5　白山スーパー林道開通
6.8　石川県議会厚生環境委員会地域視察（中宮展示館ほか）
6.12　岐阜県林政部自然環境保全課視察（中宮展示館）
6.13　石川県白山自動車利用適正化連絡協議会（白峰村）
6.15　白山緑のダイヤモンド計画検討会（県庁）
6.19　新任教職員環境体験研修（中宮展示館）

編集後記

このところ、白山スーパー林道沿いの蛇谷付近で、山菜取りに出かけて死者が出たり、行方不明者が出て新聞紙上を騒がせたりするような事が起こっています。しかし、この地域は、ユネスコの生物圏保存地域、林野庁の森林生態系保護地域、環境庁の国設鳥獣保護区、文化庁のカモシカ保護地域など各種の指定を受け、自然公園法の特別保護地区または特別地域になっているため、動物の捕獲や植物の採取は自由にできません。特に特別保護地区の場合（白山国立公園全面積の37%余り、全国的にも非常に高い）は、落葉一枚にいたってもとってはいけません。それなのに植物を採取する人などがあとをたたないのです。私たちはこの白山の優れた自然をしっかりと守り、それを私たちの子孫に遺産として残さねばなりません。皆さんにもこのことをあらためて認識してほしいと思います。ましてや命を失うような事があるのはたまりません。ちなみにもし勝手にそのような事をした場合には、6カ月以下の懲役または30万円以下の罰金に処されます。くれぐれも気をつけましょう。

前号「はくさん」第22巻4号に以下の誤りがありました。訂正しておわびいたします。

5ページ　表3　右下　91.10.04→90.10.04
6ページ　図1　タイトル　岡部→阿部

（小川）

目　次

表紙　鳥越一向一揆祭り……小川　弘司…1
里山のニホンカモシカ……林　哲…2
白山麓町村の人口の動き……寺本　要…6
白山麓で観測できる昆虫類……富樫　一次…12
施設だより　中宮展示館……海崎　夏樹…15
市ノ瀬ステーション……殊才　実…15

はくさん　第23巻　第1号（通巻95号）

発行日　1995年6月20日（年4回発行）
編集発行　石川県白山自然保護センター
920-23　石川県石川郡吉野谷村木滑ヌ4
TEL07619-5-5321　FAX07619-5-5323
印刷所　株式会社　橋本確文堂